

## 「空はどこまでも真青」

山内 利津(やまうちりつ) 85歳

例年八月は、特別な意味をもって感慨深い月となっている。

当時七歳だった私が、その記憶を記すのは、年代として最小となるのかもしれない。

両親と兄二人姉二人そして私と七人家族の平穏な日々が戦争によって一変してしまいました。上の兄は兵隊に、姉達は軍事工場に動員し、下の兄は学童疎開、そして私だけが両親と暮らすことに。私の住む函館は、ドック、青函連絡船、北海道の玄関口としての鉄道の始発駅等々と地方都市でもあったので激しい空爆を受けたのです。

警報が鳴り防空壕に入る間を失い、押し入れに隠れ私が一番下に、その上に母がそして父が重なり布団をかぶり、息をこらした恐怖は忘れがたいものです。

次の早朝大八車に日用品と私を乗せて両親は、郊外の家に疎開したのです。

夜空を焦がす空爆の炎が遠目に見たのもその日のことでした。

学校もその頃行った記憶が無いのは、休校だったからでしょうか。一年生の入学記念の写真の私はセーラー服ですが、母は上っ張りにもんぺ姿の貴重な一枚となっています。

食事は、空き地で作った野菜を母は上手に料理し鮭缶を使った「すいとん」は美味しく、今も思い出して作ることがあります。

八月十五日、ラジオの前で、父が日本は敗戦国になったと言ったこと、そしてその後のことなど知る由もありませんでした。ただ、いろいろなことに統制や検閲がありました。

子どもながらに一生懸命だったことがあります。それは、母と車で知り合いの農園に行き、私は小さなリュックサックにスイカを一箇入れてもらい上機嫌での帰り、駅のホームに警察官の姿が目に入り、反射的にホームを走り抜けようとしたこと、そのときリュックのスイカが背中を右左に打ちつけたことなどが、なんとも愛しいと思ひ出します。子どもが持っていたスイカは、検閲には、問題は無かったかもしれません。

兄や姉達も無事帰り家族七名が卓台を囲みつつましくも平穏な日常が戻りました。

戦後の物資のない時代も人々は、逞しく前向きに頑張りました。

その体験を語りあえる両親は勿論兄弟も亡くなり九十四歳になる姉一人となりました。

八月を迎える度に口ずさむ私の俳句を最後にペンを置きます。

八月やわれ七歳の眼裏に  
八月や国防色という色も  
父が引き母押す荷車雲の峰

当時の男子の出で立ちは、戦闘帽にゲートル、上着もカーキ一色で、それを国防色と行っておりま  
した。疎開するとき、荷車に乗った私は、夏野をわたる風や匂い、カッコウの声に一時幸せでした。